

プロ野球と社長の年俸

2005年5月15日
(琉球新報日曜評論)

イチローが4割を打ってくれたらなあと思う。

野球選手の年俸には、天と地の差がある。

打率が2割5分の選手の年俸は2千万円であり、

3割の選手は 2億円で、

3割5分なら 20億円である。

それぞれ10倍の差となり、2割5分と3割5分では100倍となる。

しかし、その差は20回打席に立った時、

打率 2割5分の選手は5本ヒットを打ち、

3割 の選手は6本ヒットを打ち、

3割5分の選手は7本ヒットを打つ違いである。

たった1本の差が、10倍、100倍となり、1.8億円、18億円の差となる。3割5分の選手が100人力であるわけではないし、2人力ですらない。

人の力はそんなに変わらない。1本の為にどれだけ努力したかということであろう。しかし、結果としての1本の価値は極めて大きい。

努力の壁を突き破れば新しい世界が開ける。

世間が1本の価値を認める世の中になりつつあるのかもしれない。

努力を大きな対価で認めようという方向に進んでいる。スポーツや芸能界など、必ずしもこのような世界は広いとは言えないが、世間の賞讃と高い報酬を約束してくれる世界は確実に広がっている。

小学生の将来の職業の第一志望が野球選手というだけのことはある。

ところで、会社などの組織においては、まだ個人の成果を認めない傾向がある。

会社の仕事というのは、組織で行っており、本来、一人ですべてをできるものではないから、それに差をつけるのはおかしい、野球などのように個人プレーの世界ではないということであろうか。しかし、ことさら個人の成果を認めないのも悪平等である。

例えば、日本の社長の年俸である。

日本ではせいぜい他の従業員の10倍、多くても20倍である。まして沖縄ではそこまで行かない。ヤフーの会長の240億円というのは超例外としても、アメリカや中国では数100倍というのも珍しくない。日本の社長は圧倒的に給料が少ないということになる。

確かに、仕事の質と内容を比較すれば簡単に結論は出せないのかもしれない。アメリカの社長が膨大な報酬と強大な権力を与えられていると同時に、すごい結果責任を取らされることから見れば、そして、会社の業績が経営者の戦略とか判断とか、その人の能力で非常に変わっていることも現実である。それを報酬決定権者である株主が望んでいることは確かである。

しかし、会社の経営は社長だけで行っているのではない。経営には従業員の協力が必要である。社長が給料を多く取りすぎれば、労働意欲にも影響を及ぼしかねない。ここは難しいところである。また、給料よりも仕事そのものが報酬であるという名経営者も多い。

沖縄経済同友会の例会で宗文洲先生（ソフトブレーン会長、「やっぱり変だよ日本の営業」等の著者）の話聞いた。人間は差があるから努力する。チャレンジすることを評価し、結果平等ではなく差を公平に評価する。

同じ川の源流で生まれた小魚も、同じ兄弟でも、2年経ったら、小流に住み続けていた者と大海へ旅した者ではその差は大きくなる。ヤマメとサクラマスとの差になってしまう。天と地の差となると話された。この差は野球選手の年俸と同じである。

この話をきいたあと「差」ということについて考えさせられた。差というものの大切さを理解し、「差を認める」ことが「曖昧さ」を排除し、ビジネスの効率を高めるのではないか、仕事の間では「差」を認めるべきではないかと感じた。

社長の給料を100倍にすることは乱暴だが、この「差」の認識を高めれば会社の業績もあがるのではないか。